



Title: YA (ヤングアダルト) 新書を大絶賛

❖ ご指摘に感謝

「コラムの数字が間違っている」。中央図書館職員のKさんが利用者から言われたそうです。記憶力と数字に自信がないことにかけては自信のある私です。あわてて読み直しました。

いくら読んでも間違いが見つかりません。で、もしかしたらと思いついたのが、最後の段落に書いた「このコラムも3年目に入りました」というところ。文教振興事業団が指定管理となったのは平成25年度からだからコラムも4年目じゃないか、という指摘だったのではないかというのが私とKさんの結論です。どなたか存じませんが、そういうことでしょうか。

そうであれば、これは間違いではありません。当コラムのスタートは26年4月11日。指定管理が2年目に入ると同時で、だからコラムは3年目に入ったところなのです。

思い起こせば指定管理がスタートしたころから、本紙I編集局長やT整理課長から「図書館でもコラムをいかがですか」という温かい言葉をいただいていた。ありがたい話なのですが、連載するならある程度コラムのネタに困らないという見通しが立たないと心配なので、1年間の勉強、というか取材期間をとったわけです。日々変わらずに平穏と見える図書館（そう見えてます?）も、小さな波風はしょっちゅう立つし、ヘンな、あ、いや、おかしい、これもまずいか、個性的な利用者もいろいろいて、なかなか面白いところだということが1年いればよくわかります。

というわけで、今回で50回目。冒頭の方も真面目に読んでくれているんだなあと、心からありがたく感謝いたします。本当です。今後とも気がついたことを遠慮なく指摘してください。こちらの間違いだったらひとつ勉強させてもらったことになるし、そうでなかったら、このくらいのネタになるので。

❖ 橋本治はヤッパリすごい

自分の言葉づかい、中でも敬語に万全の自信を持っている人っているんでしょうか。まあ、いるでしょうね。自信というのは自分の価値・能力を信じることであって、客観性を必要としないから。

それはともかく、いつまでたっても敬語って難しい気がしませんか。敬語には尊敬語、謙譲語、丁寧語の3種類があるとか、二重敬語はNGとか、そこら辺は別にいいんです。ところが用法を学んでいくと、なんかスッキリしないんですね。なぜかという、例外が多いから。なおかつ、どうやら歴史的変遷も甚だしいようで。しかも、現代においてはバカ丁寧な言い方が、言う人を実にバカっぽく見せてくれるし。いや現代だけじゃない、漱石の時代からか。円朝、初代小さんの時代といったほうがいいか?

と、浅学を棚に上げて、私が悪いんじゃない、もしかしたら敬語の方がおかしいんじゃないかという不遜な考えを持ったり、いやしかしちゃんとした敬語を使えないと大人として恥ずかしいなんて考える人間（私も、たぶん読んでいる皆さんも）に、目ウロコの体験をさせてくれるのが、橋本治『ちゃんと話すための敬語の本』

(ちくまプリマー新書、2005年)です。いやあ、スッキリ。

だいたい橋本治という人、くねくねした文章を書く人で一筋縄でいかない人なのですが(ですよね)、この新書、10代のいわゆるヤングアダルト(YA)向けのせいか文章が珍しく素直。そして、こういう時はこのように言うのですよ、ということではなく、どうして敬語は混乱しているのかということ、ほんとに分かりやすく説明してくれています。明治維新で失われたものとか、人との距離と敬語の関係とか……。

これ以上書くと、読んでみたいという気を削ぎますね。なあるほど!と膝を打つこと請け合いです、だからといって読めば明日からあなたも敬語名人ということにはなりません。なにしろ筆者がこう書いています。「この本は、『正しい敬語の使いかたを教える本』ではありません」。「『みなさんでそれぞれ、正しい敬語の使いかたを考えてください』という本なのです」。

ちくまプリマー新書に加え岩波ジュニア新書、ポプラ新書といった(小)中高生向きの新書は、まだレーベルが少ないだけに著者も内容も粒ぞろいです。乱立して柳の下商法がまかり通っている一般の新書より、よほど安心してお勧めできます。大人にもオススメです。(陽)